湖北の女

コンパクト・ブックス

F 1

湖北の女

一九六六年五月二十五日　初版印刷
一九六六年五月三十一日　初版発行

定価二六〇円

著者　水上勉
発行者　陶山巖
発行所　株式会社　集英社
東京都千代田区神田一ッ橋二ノ三
電話　東京(265)六一一一
振替　東京一五六五三
印刷所　大日本印刷株式会社

著者との了解により検印を廃止いたします。

乱丁・落丁本はお取替えいたします。　©1966

湖北の女

水上 勉

コンパクト・ブックス

集英社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

一章　岬の村……九
二章　醜聞……二七
三章　初恋……四六
四章　火……六四
五章　巫女……八四
六章　別離……一〇三
七章　三井寺にて……一二三
八章　大文字……一四三

九　章　絵の中で……一五七
十　章　悔恨の旅……一七七
十一章　湖北暮色……一九六
十二章　終　章……二一八

湖北の女

一章　岬の村

葛城浅子の生れた村は、滋賀県伊香郡西浅井村字菅浦というところだが、いわゆる湖北とよばれる琵琶湖の北辺にあった。滋賀県のまん中に横たわる琵琶のかたちをした大湖は、いつごろから出来たものか知らないが、物の本によると、「孝霊天皇の五年大陥落ありて湖生れぬ」とある。じつは琵琶湖は、琵琶の形ではなくて、神様の足形だと土地の人たちはいう。「むかし、近江に賊ありて、夜な夜な人家を脅し、婦女を苦しめたり。神之を怒りて、大足にて踏みつぶしければ、力あまりて、地面大きく陥没し、現今の足形となりぬ」という説がそれだ。あるいは、この神の怒りにふれて琵琶湖の土地が陥没した時、駿河の富士山が隆起したとまことしやかに伝える書もある。ほとんど伝説にちかいこの種の読み物に、いま作者が固執するのは、じつは、浅子の生れた菅浦は、まったく、足形の湖の、いわば拇指と次指の中ほどとみえる岬の端にあったからである。ふつう、われわれは、琵琶湖といえば、東海道線の車窓からみえるひらけた海のような明るい湖を想像しがちだが、じつは、この大湖には、北部へゆくにしたがって、岬や半島がいくつもつき出た暗い岩礁湖岸がつづいている。菅浦は、その中でも、もっとも大きな葛籠尾崎という岬が抱きこんでいるうら淋しい山ふところにあった。村といっても、住家はたったの二十二戸。住民の数も知れたものだが、浅子はここにある分教場で教鞭をとった父高平母さだのあいだに生れた。ひとり娘である。

浅子の生れた大正七年ごろは、まだこの菅浦まで通じる現今のような道は出来ていない。入江のとっつきにある大浦という魚港町から、渡し舟が、岬の鼻まで通っていた。村の子供たちは、分教場で三年生を終えると、四年から大浦小学校へ通ったものである。低学年だけを教える分教場は、いわゆる複々式教育で、一年生から三年生までが一つ教室で習った。浅子も父が教鞭をとった晩年に教わった。村の記憶の中でもっとも鮮明なのは、この分教場での生活だった。村から東へ少しはなれたところに陽当りのいい高台があって、畑のまん中に校舎が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

建っている。十二の机をならべた教室と、それに六畳と三畳しかない粗末な教師用の住宅があって、浅子は眼をさますと、すぐ教室へいってあそんだものだった。学校の窓から、すぐ足もとに琵琶湖がみえた。晴れた日も、雨の日も、湖面にうかんだ黒い竹生島が、黒牛がうずくまったようにみえた。竹生島といえば、この島は近江八景の一つで、弁天様が祠られている。春になると、弁天詣りの一行が、大浦の港から船に乗って出る光景もみられたが、じつは、この参詣船も裏詣りであった。本当の竹生島詣りは、東の方の湖岸にある一の鳥居をくぐって、船出をしなければならないはずなのに、物好きな人びとは、大浦から出た。浅子の村の菅浦や葛籠尾崎の暗い山蔭に映える青葉の景色が美しいので、わざわざ廻り道して湖北へきたのかもしれない。晴れた日は、よく遊山の船を見た。

舟といえば、四年生になって、はじめて大浦の学校へ通うようになった舟はかわっていた。それは古ぼけた和船だった。漁でつかいふるされたくり舟である。浅子が通うころは、高等科の子を入れてわずか六人しかいなかったが、子供たちは、菅浦を出て、大浦町の見える仏ケ崎まで歩いた。桟橋があった。四十年輩の頬かむりした孫次郎というやせた船頭がいて、赧ら顔の仏頂面でいつも鼻洟をすすりながら乗せてくれたものだ。孫次郎は雨の日も、雪の日も、三百六十五日、子供らを舟ではこんだ。

父の高平は、いわゆる訓導とよばれた当時の、師範学校出の教師ではなかった。もともと、育ったのは湖東の長浜町で、ここの高等小学校を終えると、父は検定をとって普通文官に合格、助教の免状をもらって、滋賀県学務課から助教師として、菅浦分校に勤務したものである。だから、父は一生を下積みですごしたわけで、陽の目をみる出世街道から遠ざかり、湖北の分教場を転々して生涯を終えている。そして死も、浅子には生々しい記憶として残っている。縊死であった。

浅子は父の死んだ時は大浦の学校にいて、先生のしらせで早びけして、孫次郎の舟に乗って菅浦へ帰ってきたが、仏ケ崎の桟橋へつくと、村の者が二人待っていた。

「浅ちゃん、びっくりするんじゃねえぞ、お父っあんが死んだどォ」

と伍平という村人がいった。浅子はまさか、それが本

当とは思えなかったので、瞬間、眼をキョロキョロさせて村人の顔をみつめていた。

「宮さんのうしろ山での、首くくって死んだじゃ」

ともう一人がいった。浅子は背すじに水をあびた。声も出なかった。一しょにおりた高等科の生徒が、何やら叫んで桟橋を走り出した。浅子ははじめて、大変なことが起きていることがわかり、大声をだして泣いた。

父は、すでに、分教場の住宅の一室にはこばれていて、麻模様のふとんに寝かされていた。村人たちが集まっていた。戸口をかきわけて走りこむと、枕もとにつったち、浅子は、父の顔を瞶めた。草色に変色した父の顔は、心もちふくれていて、怒ったように口をへの字に結び、白髪のまじった額に小皺をきざみ、苦悩にみちた生涯を自ら絶って死んだというさびしい顔をしていた。

「お母ん……お父っあんはなんで死んだ……なんで死んだ」

と浅子は母の胸もとにむしゃぶりついたが、さだはわきに眼をはずして呆然としていた。物もいわなかった。

この時の母親の表情も、浅子には忘れがたいものがある。父の死は、当時の新聞によると、神経衰弱といわれている。けれども、原因はあるいは、母にあったのではないかという確信が浅子の頭にやどるようになったのは、じつは、この時の母の表情がいかにも冷酷にみえ、かなしみよりも、父に対するいつものかすかな軽蔑がやどっていたように思えたからにほかならない。浅子は母の顔が、何となくおそろしくて、三畳の部屋へ入ると、ひとりでまた泣いていた。

父と母が、いつも喧嘩ばかりしていて、一日とて、明るい顔をみせてくれたことがなかったということも、浅子には、暗い思い出として残っているのであるが、なぜ、あんなに父と母は憎みあっていたか、その原因はわからない。

父は村の人たちからは尊敬されていたようだが、四十年の生涯を辺地の学校教師として送っただけあって、質素で、律義で、おとなしい性格でもあった。無口なタチで浅子には何一つ、きびしいことをいわず、行儀や、勉強を、やわらかく躾けてくれていた。母は、どちらかというと、楽天家で、明朗型といえた。父の無口が目立って陰気にみえたのは、母が、とてつもなく大笑いしたり、

がらがら声で物をいったりしたせいかもしれぬが、この母と父は性格的に合わなかったのだろう、ついぞ、楽しく笑いあって、食膳をかこんだりしているのをみたことはなかった。母のさだはやはり長浜の女で、糸繰り工をしていたという。父とは恋愛で一しょになったというが、いったい、父ががらがら声であけすけと物をいう母にどのような気持ちで結婚を申し込んだのか、浅子はいまでもそのあたりの真意がわからないのであるが、母のいってくれたことによると、だいたい、次のようなことになる。

「お父さんはな、はじめは長浜の学校につとめておいでじゃった……そン時に、あたしと知りおうたンやな。あたしは、町工場で繭むしをしたり、糸繰りをしてたんやけど、お父さんから求婚されたときはびっくりしたわな。何せ、お父さんは、あんな無口な人じゃろ。あたしは、あけっぴろげだしさ……でも、あたしの方が、あの人が好きだったンだよ……背が高くて、鼻すじのとおった立派な顔だちやろ。きっとこの人は、将来はえらい先生になるかもしれん……わたしゃ、そう思うたもんやから、承諾したんよ。でもね、お父さんは一生、分教場の先生で……転々して、滋賀県の北の方を……わたしをつれて廻ったよ。わたしの夢も、破れたけれどね……まあ、あの人があたしをこうして、大切にして下さると思うと別れもせずにさ……あんたを生んで……ついてきたんだよ……世間では、いい人だといわれたけれど、それは外づらでね、家へはいると変屈で、陰気で、意地悪での、手に負えない人やった……けどさ……別れもせんとずうーっと辛抱してこれたんはやっぱり、あたしが、あの人を好きだったンだねえ……」

むかし、女工をしていた母は六年生しか出ていないから、教育のある女とはいえない。たとえ検定試験をとったにせよ、向学心でみちあふれていた父が、そのような母を娶って、暗い結婚生活に甘んじてきた裏側には、あるいは、母への執着もあったのだからか。

浅子は、二人の争いが、憎しみにかわり、あけても、くれても、喧嘩ばかりするようになった原因について、かすかな、記憶がある。いや、それは、浅子の生涯にも大きな影響をあたえる事件となったのだが、まだ五年生のころだったので、はっきりした確信はなかった。それは母の姦通の疑惑であった。

浅子は前述したように渡し舟で通った大浦小学校の五年生の春に、父が講習をうけに大津へいって一週間を留守にしたことがあった。分教場には一人しか教師はいなかったから、父が講習をうけるあいだは、大浦本校から、代りの教師が舟で通った。神崎という若い教師だった。まだ師範を出て間もない新入教師で、神崎は、父の講習期間を孫次郎の舟に乗って菅浦まできた。浅子は、ある朝、桟橋のところで腹痛をおこし、辛抱しながら舟に乗った。舟の上ではげしい下痢をおこした。孫次郎が舟をもどして、桟橋へあげてくれて、

「お前さん、今日は学校は休みにせい、お尻の始末をして帰りな」

といった。浅子は、恥かしい思いだった。桟橋を走って、山へ入り、腹痛に耐えながら、下痢の始末をしてから、分教場へ帰ったが、すでに、分教場には、孫次郎の舟で来た神崎が十人の低学年を教えていた。浅子はお尻がよごれているので、母に叱られはしないかとはらはらしながら、住宅へかくれるようにして廻った。

と、教室には生徒たちが、習字か作文でもあたえられて勉強していて、頭がチラホラ見えるだけで静かだった。黒板の前に神崎の姿がなかった。

浅子は裏から廻って、住宅の戸口へきてしずかに戸をあけた。と、部屋の中に、母と神崎がもつれるようにして重なっている。戸の音で、二人は離れてにらみあった。浅子は、子供心に見てはならぬものを見たように思った。母は紅い湯文字からはみ出した白い足を咄嗟に被ってうしろ向きになった。

「浅ちゃん、お前、もどってきたのけ、学校はどうしたや……」

と神崎はのっぺりした顔を瞬間、心もちゆがめて訊いた。

「途中で、腹いたおこして帰ってきたんや」

と浅子はこたえた。

「腹痛か？　そりゃ難儀じゃ。いたむか」

浅子は山でお尻を始末したとはいえ、着物にも、便がついていて、臭かったので戸口に立ったままうしろ向きの母にいった。

「お母ん、着がえ出して……舟の上で……腹がいとうなって……下痢したんや」

といった。さだはほっとしたようにふりむいた。

「下痢じゃと……おめ、何喰うた……おかしなこっちゃ」
さだは、怒るどころか、急にわらいだしてやさしい物いいになった。
「あら、くさやの……早よ湖へ出て浴びてこ……お尻洗うてこ」
タンスをあけて着がえをだすと、ぽいと土間の戸口へ投げてよこした。浅子は着物を抱えて、九十九折になった道を湖へ走っていた。胸がどきどきした。それは複雑な音であった。
母が変にやさしかったこと。そのやさしさは、神崎と二人で、抱きあっていたのを浅子にみつけられたことへの反撥として出たにちがいないこと。神崎が、教室の子供たちを放ったらかして、母の部屋へ入っていたこと……。
浅子は大津へ講習にいっている父のことを考えると、母が父にだまって、そのようなことをしているのは、いけないことであり、神崎という教師は憎い男だという思いがつのった。いつのまにか、腹痛はとまっていた。母と神崎のいる住宅をにらみながら、浅子は湖岸の水でお尻を洗った。それからは浅子は、母にやさしくされた。お菓子をもらったりした。母が神崎とのことを、内密にしてくれとたのんでいるような気がした。父は七日目に帰ってきたが、あいかわらず、仏頂面をしていて、母とはあまり話をしなかった。
講習が終ってから、いっそう父と母との間は、浅子には険悪になったように思われた。父が縊死したのは、一年後だ。直接、母と神崎とのことが原因していたとはいえないが母が父に、神崎とのことを告白したか。それとも、父が察知して、ひとりで苦しみ悶えたあげくに、一年の時間が経過したのちに、発作的に首をくくったか。それはわからないことだったが、しかし、自殺の原因になっているかもしれないという疑いは充分あった。
「神経衰弱じゃったんよ……お父さんは……頭のええ人でな……物事を考えてばかりおりなさったから、気が狂うたんやな……あんまり勉強ばっかりするとお父さんのようになってしまうぞ……」
と村の人たちが噂しあうのをきいていて浅子は、それを真にうけることは出来なかった。——母が父を死に追いやったのだ……。という判断が、浅子の心の中で根

となるのは、やがて、浅子が母と一しょに菅浦を追われて、大浦で暮すようになってからのことである。

父が死んだのは、浅子の六年生の時だから、浅子が十三歳。昭和六年の春のことになる。分教場の教師をしていた父が死ねば、浅子と母は、いつまでも、住宅にいるわけにゆかなくなった。それに、父は、自から首を縊って死んだのだから、新聞沙汰にもなった。これは菅浦の村としては、歴史的事件であった。子供を教える教師が、たとえ、神経衰弱だったとはいえ、自殺するなど、教育上からいっても香しいことではない、というのが、本校の校長たちの意見でもあり、村人の中にも眉をしかめる者がいた。さだと浅子は村人たちから、同情はされたが、どの人たちの眼も白く見えた。新しい教師が赴任してきたのはそれから間もなかったが、当然、住宅をあけわたさねばならない。夫と共に、湖北の分教場を転々してきた母には、これといった家財はなく、陽に灼けた桐ダンスが一つと、茶ダンスが一つ、柳行李と身のまわりの傘やら靴やらを入れた大きな箱が一つあるきりで、ひっこしもかんたんだといえたが、いってみれば、母娘はゆくあてがなかったのである。父の死は、突如として、母娘を路頭へ放り出したかたちになった。

浅子は、父の死の原因は、母にあったという確信はふかまってはいたけれど、母に対する哀れさも、子供心に抱いたことをおぼえている。菅浦の区長である木川太郎左衛門という六十すぎた男が、大浦の漁業組合で、女手を求めているときいて、世話してくれる話がすすみ、母の所へ相談にきたのは、初七日がすんで間もない頃であった。

「新しい先生が大浦からきて下さったが、こんどの三宅先生とても、やっぱり、村に住んでもらわんことにゃ、気の毒だでの……それで、住宅もあんたらにゃ出て行ってもらわんけりゃならん。ゆくあてのないもンを追い出すというのも何じゃで、本校の校長さんと相談して……さがしたんじゃが、あんた、大浦の漁業組合へつとめてみんかいや。どうじゃな」

といってくれた。母はにっこりして、

「大浦にそんなええつとめ先がありますのなら……お世話して下さい……わたしは何でもします。この娘が学校を出るまでは……気ばらんけにゃなりませんさかい」

今から思うと、母は大浦へゆけるのが嬉しかったの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com